

## 西神教会20年の証

牧師 牧野信成

1995年の開拓に始まる西神伝道所のあゆみは、板宿教会の有志によって開始され、教会の祈りに支えられて月日を数えて来ました。そして2013年10月に西神教会設立を果たし、それまで導かれた神の恵みに感謝して独立教会としての新たな歩みに踏み出しました。今ここに伝道開始20周年を記念して文書にまとめるのは、これまでにささげられた兄弟姉妹たちの祈りと献身を記録に留めることで、私たちが仕える頭であるキリストに栄光を帰し、感謝の意を形にするためです。また、そこに聖霊の確かな導きを確認して、教会を建て上げ、福音宣教を押し進めるのは三位一体の神の主権によるものであることを教会の内外に証するためです。

この20年の歩みは板宿教会小会の監督の下で、三人の牧師によって説教と牧会がなされました。私はその三代目に当たり、2011年7月から今日に至る4年間しか知りません。ですから、私には期間全体を通しての歩みを振り返ることができませんが、この4年間の牧会を通して気づかされたことを記してみます。

まず、板宿教会が西神教会を生み出した事例は、改革派教会の伝道としては一つの典型例となったものと思われます。同様の例が他に無いわけではありませんが、一つの小会のもとで伝道所が順調な成長を果たし、新たな小会を生み出すことは各教会が伝道の目標とするところです。その始めに板宿教会の志があったことが重要ですが、それを実現する兄弟姉妹が実際に与えられて、献身的な奉仕がささげられて来たことがその後の伝道所の基盤を造りました。すべてが牧者・宣教者の肩にかかっている形の開拓ではなく、板宿教会ですでに長老・執事に任職されていた兄弟姉妹が交わりの核となったことで、伝道と教会形成が分離することなく西神ニュータウンでの宣教活動が開始されました。

初代の牧師として招聘された長谷川潤牧師は神学校時代の私の先輩でしたが、伝道熱心と教会人としての召命を備えた相応しい働き手であったと思います。赴

任当初は阪神淡路大震災に見舞われて大変苦勞の多いお働きをされましたが、糀台4丁目の旧会堂から現会堂に移転するまでの期間、順調に教勢を伸ばして伝道所を支えました。特に牧師の家庭が地域伝道に果たした役割が大きかったように思います。

西神教会は教会学校に熱意をもって取り組んで今に至ります。伝道所開設と同時に始められた「こひつじ会」には地域の子どもたちが随時集って来ており、それが必ずしも礼拝出席に結びつかなくとも、地域の家庭や学校に対する教会の認知に役立って来ました。今現在、小学校前でのチラシ配布が許可されているのは糀台小学校だけですけれども、これが今も継続されているのは長谷川先生時代に牧師の子どもたち3人が同小学校で過ごしたことが大きいのではないかと思います。

「こひつじ会」の地域への働きを証するのは、そこを卒業(?)していった子どもたちが成長して、今もまだ教会との結びつきを保っていることです。2013年の秋には「こひつじ会同窓会」を催し、すでに中高生になっている子どもたちに呼びかけたところ十数名も来てくれて驚きました。これらの子たちは幼稚園・小学校の限られた期間ではあれ、継続的に西神教会に関わって聖書のお話を聞き続けて来ています。そこで育まれた教会との関係が、たとえ心の中だけのことだとしても絶えてしまわずに続いていることに、地に根を下ろした教会の息の長い宣教活動を思わされます。

二代目の赤石先生は私がイスラエル留学中に知り合った友人でもあり、西神教会の牧師になってからも同じ西部中会で先生の御働きを見てきました。御言葉を語る賜物に秀でた先生の牧会のもとで多くの加入者が与えられました。牧師の継投が上手く進んで、教勢がさらに伸びたのはこの時期の祝福でした。

そして三代目の私に手渡されたのは教会設立に向けてのバトンです。既に経済的には板宿教会からの援助を得なくてもよい状態にあり、伝道所委員会が十分に機能する中で設立を目指す段階でした。そこで果たされるべき課題は、小会・執事会を構成する役員を擁立することと、西神教会が改革派教会の枝として聖書の規範に則って自立した教会形成に取り組むことでした。そこで祈禱会や全体学習会などの機会を用いて、信仰告白と長老主義政治についての学びを進め、求道者や他教派からの加入者のために入門講座を開設してカテキズム教育に取り組みました。牧師が一人で旗を振っても実りはないものですが、こうしたプログラム

をよく理解し、謙虚に学んで吸収して行かれたのは、キリストに忠実な西神教会の兄弟姉妹方でした。それが教会設立に実りを見、20年の歴史に大きな節目を迎えて、次に歩みだすためのステップとなって今に至ります。

西神教会の未来に向けてのビジョンは、2014年の一日修養会でも話し合われたように具体的な展望を持っています。地域のランドマークとなるような会堂を持つことや、西神ニュータウン全体を視野に入れての新しい伝道所の開設などを願うことも、主によっては許されるはずですが、しかし、同時に、私たちは今に導かれたこの独立教会を維持してゆかねばならない務めをも共に負っています。経済的な自立も、小会・執事会の運営も、私たちには余裕があるわけではなく、どちらもギリギリの線で維持している状態ですから、今後も地道な伝道と教育による教会員の増加と役員への補充・交代が不可欠です。高齢化が進み、伝道が停滞しているのは日本の教会全体の傾向からして、今私たちは遠い先を見るよりも目先の現実に対処すべきなのかもしれません。それでも、私たちはここから始まる神の御計画と聖霊の御業に期待して、いつも遠くを見ていたいと思うのです。真の礼拝を通して天の栄光を垣間見せてくれるキリストに励まされて、神の言葉が打ち開く次のステップへと進みたいと願います。それを証するように新しい兄弟姉妹が毎年私たちの群れに一人、二人と加わります。そうして仲間を増やしながら、西神教会は次の30周年を目指します。バトンを次に受け取った世代が、今の私たちの証に励まされて御国へ続く主の道に邁進できるように、今の機会に私たちの主イエスへの愛と献身を新たにしたいと思います。

『20年史』巻頭言(2016年)より